
(令和4年10月28日掲載)

共に笑える日本に



にしゃんた

羽衣国際大学現代社会学部教授。1969年、スリランカ生まれ。7万円と片道切符を手に来日し、現在はタレント、羽衣国際大学教授のほか、落語家、随筆家、講演家、空手家、子育て中の父親など多くの顔を持つ。多様性の語り部(ダイバーシティスピーカー)として、全国各地で多文化共生や人権などをテーマに講演活動も行っている。

「外国人との共生」は、日本において古くて新しいテーマだ。私が来た35年前は、この国はバブル経済の真ただ中だった。この国で当時「国際」がはやっていた。外国人がさほど住んでいなかった、私が住んでいた地域ですら週末にもなると、あちこちで国際交流パーティーが開かれていた。今思えば、当時の日本は金銭的にも精神的にも余裕があって、「国際」という言葉は楽しく集うための便利な言葉だったに違いない。

ただ、こうしたパーティーに、全ての外国人が招かれていたわけではない。集まったのは、留学生を中心とした来日間もない者だけ。いわゆる「オールドカマー」と呼ばれる、戦前から日本に住んでいる人たちや、その子孫の姿はなかった。オールドカマーと出会った場所は、人権イベントだった。「国際」の場の外国人は笑っていたが、人権集会にいる外国人は悲しそうだった。

この経験は、私にとって日本社会で外国人を取り巻くダブルスタンダードのようなものを感じた瞬間だった。華やかで楽しい国際交流パーティーの時間は、非日常的なまやかしてはないか、と思えるまでさほど時間がかからなかった。私のちょっとした気づきはあながち間違いではなかった。

日本にも「外国人差別」や「人種差別」などという言葉はあるが、この短い在日期间私なども、それらを一通り経験しているに違いない。入居拒否されたり、乗車拒否されたり、デバ地下で試食を拒否されたことさえある。人間として見てもらえないことで心に深く傷を負うと同時に、日本社会で外国人との共生を妨げている心の壁を痛感した。

中には、私が経済学博士号をもって大学教授になっている姿を見てうらやむ人がいるが、その点について個人的には全く違う評価をしている。仕方がなく今の生き方をしていると

いうのが答えだ。

私は大学卒業を控え就職活動をしたが、その時思い出したのは、来日早々に温かく受け入れてもらった「国際」だった。国際と名の付く組織の一覧表を作って片っ端から接触した私が、そこで初めて聞く日本語、「国籍条項」と出くわしたのだ。

日本国籍がないと国際機関に就職できない、「日本国籍限定の国際」はジョークにすら思えた。それは日本の社会にある制度の壁を身に染みて感じた瞬間でもあった。これは過去の話ではなく、国際性を自慢する私が住む街には、今でも消防団員や民生委員になるための資格として国籍条項が残っている。

日本においての外国人との共生はもはや現実的な問題だ。受け入れ態勢が整っていない現状を鑑みると、私は移民受け入れに慎重だ。ただ、日本政府や経済界が中心となって外国人の受け入れを確実に進めている。社会の構成員として、2人に1人が男女のいずれかであると同じように、決まった割合の障がい者がいるのと同じように、当たり前外国出身者がいる景色は今後ますます進むことになる。

日本社会で外国人住民が増えることが決まっているが、問題はわれわれがどう生きるかだ。現状は外国人の友達がいって、助け合い、学び合い、楽しんでいるような日本人は一握りしかない。海外に出掛けるとなると金も時間もかかるが、隣に外国人が来てくれていると思うと、ありがたい話に思えなくもない。おのおのの幸せや成長のためにも、日本のさらなる繁栄のためにも、社会に存在している人権侵害をもたらす心や制度の壁を互いに乗り越えながら、共に笑える日々を目指すしかない。



講演活動はライフワーク